

健康通信

「子どもが欲しい」と願うご夫婦を支える部門の紹介
「小牧市民病院 産婦人科 不妊部門」



産婦人科 胚培養士
糸井 史陽

はじめに

不妊治療とは、不妊症で悩む方々が受ける治療（タイミング療法や人工授精、体外受精・胚移植、顕微授精など）の総称です。その中の体外受精や顕微授精のことをまとめて生殖補助医療と言います。近年、女性の社会進出等により晩婚化・晩産化が進み、日本国内で不妊症に悩む患者さんの数は5組に1組で、生殖補助医療による治療総数は44万件以上と世界で最も行われています。また、体外受精で産まれた総数は約53万人、年間では約5万4千人と総出生児の約18人に1人となっています。今回、当院にて生殖補助医療を行う部門について紹介します。

不妊症について

不妊症とは、生殖年齢の男女が妊娠を希望し1年間避妊せず性交を行っても妊娠しない場合と定義されています。不妊の原因は、女性側に原因があると思われるかもしれませんが、実際には、不妊原因の半分は男性側にあります。その中でも男女共に加齢が精子・卵子の質に大きく影響します。なかなか妊娠しないと感じた場合、一度婦人科を受診することをお勧めします。

生殖補助医療の診療部門の紹介

当院の不妊部門の診療内容は、タイミング治療や人工授精などの一般不妊治療から、体外受精や顕微授精

などの生殖補助医療にまで対応しています。診察や採卵・移植は、複数の女性医師を中心に、ご夫婦の状況やご要望に合わせた治療を提案しています。

生殖補助医療を支える胚培養士の紹介

培養室では、胚培養士が、ご夫婦の大切な配偶子や受精卵を培養・管理するため、受精卵をリアルタイムに観察できる培養器（写真1、2）や高度な技術が必要とする顕微授精の機器（写真3、4）など様々な機器を取り揃えています。胚培養士は、表舞台に出ることの少ない「縁の下の力持ち」的な存在です。しかし、体外受精や顕微授精などの治療の結果は、胚培養士の力量で大きく変わってきますので、常日頃、個々の技術や知識などの向上に努めています。

今後の取り組み

当院では、総合病院という特徴を活かし、他科と連携して治療を行っています。例えば、若年性ガン症例を対象とした医学的適応での男性精子および未受精卵や胚（受精卵）の凍結、射出精液に精子が認められない高度な男性不妊症例を対象とした手術による精巣内精子の採取など、幅広く取り組んでいきます。

◎診療内容について

診察日：平日（土、日曜日、祝日、年末年始 12/29 - 1/3 以外）

来院時間：8:30 - 11:30

- ・一般不妊治療（タイミング療法、人工授精など）
- ・生殖補助医療（体外受精・胚移植、顕微授精、凍結融解胚移植など）



写真3



写真4



写真1

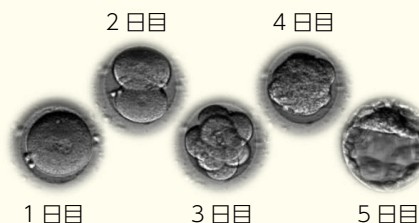


写真2